仏教を身近にする伝道誌　　浄土真宗を弘める会

道標

どうひょう

d o h y o

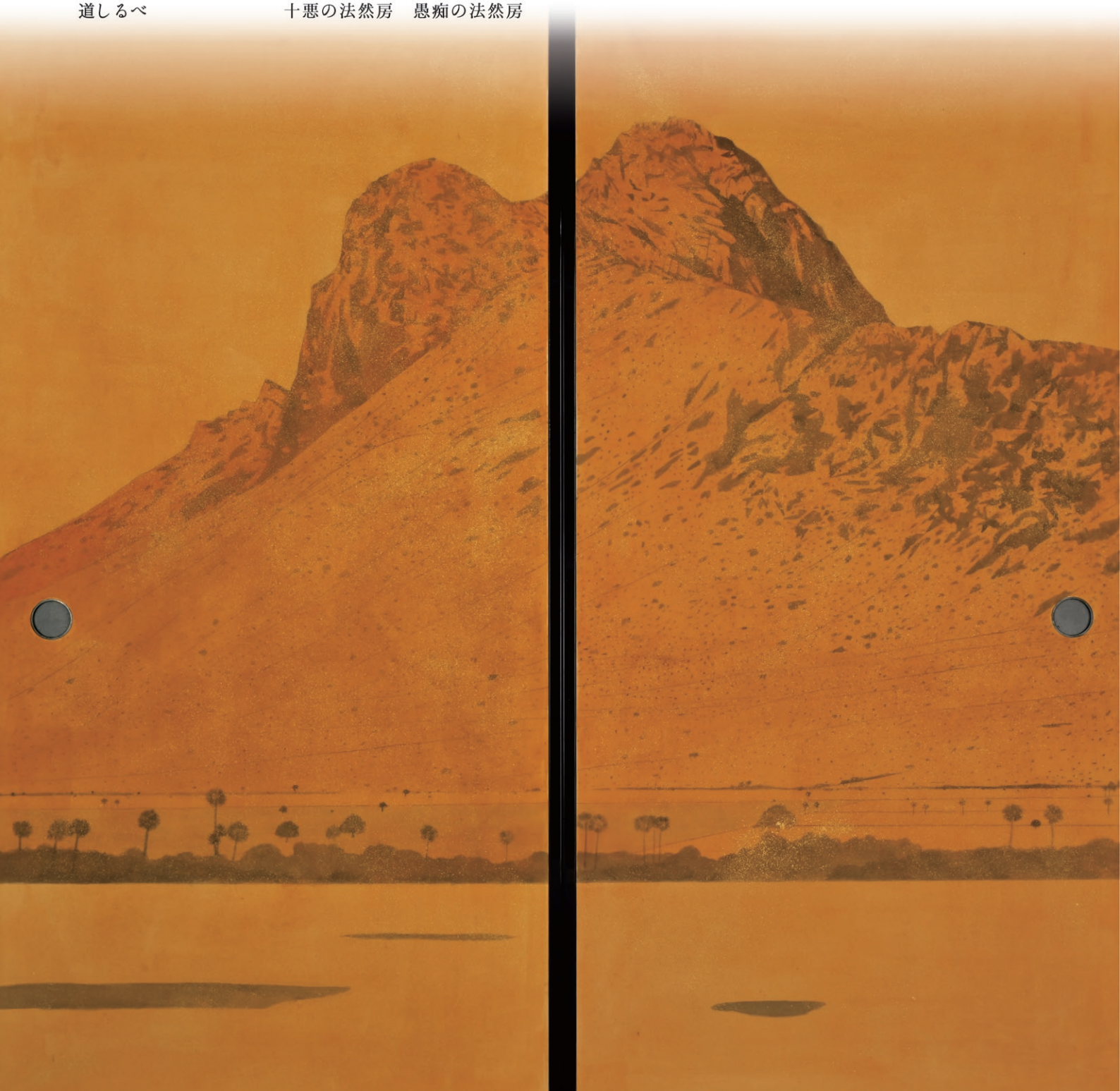
2023 秋季号

年間特集「まつり」

第四回・日々の予感　いとう せいこう さん

連載

あなたのいのちの物語　漢詩・俳句と安らぎ
伝承を科学する　能楽における無音の間の効力
道しるべ　十悪の法然房　愚痴の法然房



年間特集　まつり

日々の予感

第四回　いとう せいこうさん

祭りそれ自体の熱狂もさることながら、祭りの気配というか、浮き立ち始める気分というものにたまらないものがあって、それはつまり生の「予感」の醍醐味のようなものであろう。

例えば十数年住んでいた浅草には言わずもがな三社祭があり、多数の町神輿が街中を占拠する果ての最終日早朝に、ついに三基の大きな宮神輿が出る。浅草から引っ越してからも、私は毎年必ずこの祭りの中にいる。

この宮神輿にお乗りになって町を練り歩くのが、漁師として隅田川から浅草観音を引き上げた檜前浜成（ひのくまのはまなり）、弟の檜前竹成（ひのくまのたけなり）、そしてそれを槐切株の上にお祭りするように言った郷士の土師真中知（はじのあたいなかとも）のそれぞれ神格化された状態なわけだけれども、要するにこれは人が神となったことの象徴である。

むろん浅草神社、三社様それ自体がその三人の人が権現となった状態を祀る場所なのだけれど、特に各々の力が「みあれ」するのが祭りの最後の日、宮出しとなる。

まだ神輿をかつぐことをしていなかった頃、一時浅草神社の中に仮設の見物席が設えられた時期が数年あり、私は熱狂的な地元の祭り好きのおかげで毎年そこで宮出しを目の前で見、浅草中を移動した三基が帰ってくる宮入りを見た。

で、最初に書いた「予感」のことだが、まずは最終日の前夜、私たち見物人は深夜二時頃に行きつけのバーに集合する。宮出し自体は朝の六時に始まるが、当然その二時間ほど前には席に着いて隠れて酒など飲みながら静粛にしていなければならない。となると特別観覧席に着く四時には、もう胸がときめいているわけで、そのときめきの始まりに向けて、私たちはうまい酒で自分を清め、落ち着かせるわけである。

さてさらに問題は、バーを出て浅草神社境内に向かう午前三時半くらいで、真っ暗な街のあちこちにすでにいつでも神輿を肩に乗せ得る状態になった担ぎ手たちが十数人ずつ、時には数十人で無言のまま立ち尽くし、気合いを確かめあっている。彼らが暴れ出さないように機動隊を載せた数台の大型車がその近くに止まっているから、革命前夜のような緊張感がみなぎる。

その中を我々もまた無言で歩く。祭りが始まる一瞬のぶつかりあいに向けて。

見物人も担ぎ手もお神楽も、みな存在が溶け合ってしまう

それが震えるほどの快楽でもあり、恐怖のようなものでもあり、自分は神輿の棒めがけて走り出す側の人間ではないはずなのに、例の「予感」というものが町全体に染み出し、すっかり伝染してしまっているのがわかる。だから気合いを入れてじっと下を向いている袢纏姿の担ぎ手たちが、他の集団の担ぎ手に棒を奪われないように、なんと二時間半も前から集中していることにこちらも手に汗握る思いがする。

その時、つまり見物人も担ぎ手も、どこか存在が溶け合ってしまっていて、自我の輪郭を半ば失いつつある。むろん担ぎ手は命がけだから我々見物人のことなど考えている余裕もないようにも思うが、しかし宮出しが始まってしまうと彼らが見物人へと自分たちの団結力を誇らしくアピールしたがっているのもわかる。だから静かな夜の、あるいは朝直前の想像力の中でやはり私たちは溶け合っているのだ。

さて我々見物人が席に着いてじっと目の前の神輿を見つめ、そこに誰が現れ出るのだろうと息をのんでいるうち、境内の能舞台の上で笛が鳴り、太鼓が鳴り始める。神楽のチームが「予感」を盛り上げるべく、あるいは落ち着かせるべく演奏を始めるわけだ。

これが祭りを実にうまくコントロールしていて、まだまだ担ぎ手の大集団が登場してこない時にはゆっくりしたリズムで余裕をもって笛太鼓を鳴らす。だが、見物人のどの一角かがどよめき、決死の目をした担ぎ手がそちらから現れ出ると、いや現れ出る直前、すでに演奏の速度は上がっており、その音色もちがっている。

祭りが終わった途端、もう翌年のことを考えている私

あれは本当に不思議で、別に誰かが双眼鏡で遠くを監視しているわけでもなければ、トランシーバーで連絡をとりあっているわけでもない。いわば「あうんの呼吸」とでもいうもので、すなわち例の「存在の溶け合い」が神楽の演奏者と担ぎ手の間に起きているとしか言いようがない。

ただしこうなると、あとは歴戦の神楽チームが祭り全体を支配する。少しあおってみせるかと思えば、わざと同じ調子を続けて少し全体を退屈させる時もある。なにしろ神輿が上がるまでにはまだ時間があるからだ、つまり「予感」を引き伸ばして楽しむ時が。

そのうち、ついに祭りの長からマイクで挨拶がある。ここで「予感」はマックスへとせりあがる。そのあとで頭（かしら）の厳しい声で三三七拍子への合図が発される。数千人の担ぎ手の前で、頭が「上げろ！」と命令する。

その瞬間。祭りに参加する誰もが、それぞれの仕方で待っていた瞬間。それが訪れるとわかっていながら、本当にそうなるのだろうかと胸をときめかせていた一瞬。それが、まさに眼前でリアルなものとなる。

すでに神輿は上がっており、それが左右にもまれるのは担ぎ手たちの肉体のぶつかりあいがすさまじい力で波立っている。各集団のリーダーたちがそれぞれ金切り声で指示を出す。当然あの神楽の名手たちは最も狂躁的に場を盛り上げる。

今は特別観覧席がないものの、それでも私は取材の形で、あるいは地元の放送のゲストとして、この「予感」が一挙に現実になる瞬間を体験しに浅草へ向かう。いまだに本籍はそこに置いてあるくらい好きな街へ。

そしてこれはあらゆる祭りを持つ場所の人たちが言うことだが、「祭りが終わった途端、もう翌年のことを考えている」というのは私にとっても同じで、どこで担がせてもらおうかなとか、着物を新調しようかなどと考え始める。つまりそれが「予感」を高めることなのだ。

祭りにとって「本番」とは、実はその「予感」の長い時間をも指しているのであって、ハレとケとはよく言われるが、結局「予感」の喜びの中にいる限り、うっすらとしたハレが日々、我々の日常に侵入しているのだ。

そう思うと、つまらない日などない。

いとう　せいこう

1951年生まれ、東京都出身。1988年に小説「ノーライフキング」でデビュー。1999年、「ボタニカル・ライフ」で第15回講談社エッセイ賞受賞、「想像ラジオ」で第35回野間文芸新人賞受賞。みうらじゅんとは共作『見仏記』で新たな仏像の鑑賞を発信している。現在はnoteで「ラジオご歓談！」を配信中。朝の連続テレビ小説「らんまん」に出演中。

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

22話目

「漢詩・俳句と安らぎ」

夏目漱石『思い出す事など』

夏目漱石（一八六七―一九一六）が死に直面した「修善寺の大患」について、自ら語った文章だ。漱石は一九一〇年の六月ごろから胃腸病が悪化し、東京で入院治療を受けた後、伊豆に湯治に出かけたが、八月になって大量の吐血をし意識を失う事態に至った。その後、漱石は一〇月に帰京しさらに四ヶ月余り入院し、翌年二月二六日に退院した。『思い出す事など』はこの間の入院中に書かれたものだ。

多量の吐血をして意識を失った経験、またその後の心境についての語りはまさに「いのちの物語」だ。漱石自身は吐血の前後、意識を保っており、その間のことをほぼ記憶していると思っていた。ところが後から鏡子夫人の日記を読み、意識を失っていたことを知る。「徹頭徹尾明瞭な意識を有して注射を受けたとのみ考えていた余は、実に三十分の長い間死んでいたのであった。」（四八―五〇ページ）

漱石はこの生と死を行き来した「生死二面の対照」の経験が、自己の理解を超えたものであるという。「どう考えてもこの懸隔（かけへだ）った二つの現象に、同じ自分が支配されたとは納得出来なかった。よし同じ自分が咄嗟の際にこの二つの世界を横断したにせよ、その二つの世界が如何なる関係を有するがために、余をして忽ち甲から乙に飛び移るの自由を得せしめたかと考えると、茫然として自失せざるを得なかった」（五四ページ）。だが、そこにはある種の安らぎの境地が生じていた。「余は一度死んだ。……果たして時間と空間を超越した。しかしその超越した事が何の能力をも意味さなかった。余は余の個性を失った。余の意識を失った。ただ失った事だけが明白なばかりである。どうして幽霊となれよう。どうして自分より大きな意識と冥合出来よう」（六一ページ）。

だが、そこに「煩悶」や「生存競争」によって絶えることがない闘争の現実からの脱却があった。今まではあらゆることを自分の意志で実現しなくてはならなかった。ところが「いくら仕（あせ）うと焦慮っても、調わない事が多かった。それが病気になるとがらりと変わった」（六八ページ）。多くの人々が自分を助けに来てくれ、好意を寄せてくれた。「四十を越した男、自然に淘汰されんとした男、さしたる過去を持たぬ男に、忙しい世が、これほどの手間と時間と親切を掛けてくれようとは夢にも待設けなかった余は、病に生き還ると共に、心に生き還った。余は病に謝した。また余のためにこれほどの手間と時間と新設とを惜まざる人々に謝した。そうして願わくは善良な人間になりたいと考えた。そうしてこの幸福な考えをわれに打壊す者を、永久の敵とすべく心に誓った」（六八―六九ページ）

このように他者への感謝の念とともに、自然への親しみも深く心に染みるものがあったようである。『思い出す事など』には、漱石が病床で創作した漢詩や俳句が毎回、書き込まれていた。そこにも死を通り越したことに由来するような安らぎの表現が度々見出される。

「空が空の底に沈み切ったように澄んだ。高い日が蒼い所を目の届くかぎり照らした。余はその射返しの大地に洽ねき内にしんしんとして独り温もった。そうして眼の前に群がる無数の赤蜻蛉を見た。そうして日記に書いた。――「人よりも空、語よりも黙。……肩に来て人懐かしや赤蜻蛉」。そして、「東京へ帰ったあともしばらくは、絶えず美くしい自然の画が、子供の時と同じように、余を支配していたのである」という（八三―八四ページ）。

こんな一節もある。「東（ひがし）君はわざわざ妻（さい）の所へ行って、先生はあんな尤もな顔をしているくせに、子供のように始終食物の話ばかりしていて可笑（おか）しいと告げた。」そしてほのかなユーモアもはらんだ以下の句がある。

腹に春滴（はらわたしたた）るや粥の味

島薗 進（しまぞの・すすむ）
1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院グリーフケア研究所客員所長、著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生――帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくってもいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学する

能楽における無音の間の効力

ある物ともうひとつの物とのあいだの「何もない空間」を、別の物で埋めつくすのではなく、あえて余白のまま残す。それによって、見る者の想像力がより強くかきたてられ、さまざまな方向へと広がる。そこに間の効力がある。

何もない空間は、視覚上だけではなく、聴覚上にも生みだされる。ひとつのフレーズから次のフレーズへと移るあいだにおかれた少し長めの無音の時間。その無音には、音の残像が聞こえたり、凍りつくような緊張が見えたり、空気が一瞬で入れ替わるドラマが感じられたりもする。

能楽において、無音を大胆に演出する作品として代表的なのが、〈道成寺〉と〈清経（音取）〉である。

〈道成寺〉では、主役（シテ）の白拍子が、釣鐘の下で特殊な舞「乱拍子」を舞う。無音の舞台の上に、シテはじっと構えて立っている。無音の緊張が高まったところで、小鼓がポンとひとつ音を出す。あるいは「ハ」のように激しい掛け声をかける。シテはそのタイミングに合わせて、一足踏み出たり、足拍子を踏んだりする。そしてすぐに静止の姿勢にもどり、次の音を待つ。このようにして、無音の時間が重なっていく。

小鼓が出すひとつの音とその次の音（あるいは掛け声）とのあいだの無音の時間は、およそ十五秒である。私なりにたとえると、その無音の十五秒は、勢いよく打ち上げられた球体が、空に高くあがり、激しく地上に衝突するまでの時間といったイメージである。

このような十五秒ごとの無音の連続が、およそ二十分つづいたあと、舞台は急変する。笛と大鼓が急速なテンポで激しく演奏をはじめ、シテもそれに合わせて激しく舞いはじめる。その勢いにのってシテが鐘の中に飛び入ると、同時に鐘が落下。激しい場面は突如として終わる。

乱拍子のあと、激しく舞い、鐘に飛び入る場面
〈道成寺〉（シテ：浦田保親）(c)Yasuchika Urata

そのクライマックスにいたる前の二十分の、鼓とシテがつくりだす無音の連続。その緊張感は、本性が蛇である白拍子の、何としても鐘に入り込もうとする執着心を静かに、しかしそれゆえにより強く表現する。

〈清経〉という作品では、夫である平清経の死を知らされた妻の前に、その亡くなった夫、清経の幽霊がシテとして登場する。その登場の特殊演出に「音取」がある。清経は笛を好み、自らの最期のときにも、笛を吹いていた。そういったシテが、笛の音に合わせてあらわれる演出である。舞台上では笛が、静かな旋律を独奏する。フレーズどうしのあいだにはやはり、十秒以上の大きな無音の間がある。シテは、笛のフレーズに合わせて幕を出て橋掛を歩んでくる。笛が鳴り止むと、シテの足運びも止まる。ふたたび無音の時間となり、シテはじっと橋掛の上に立ちつくす。緊張に満ちた無音が頂点に達したところで、笛がはじまると、シテも歩み出す。こういった静と動との交替を何度か繰り返しつつ、シテは舞台上に、つまり夫を想う妻の夢に登場してくるのだ。無音の時間と笛のゆったりとしたフレーズとの交替が、夢と現実とが交錯する様子を描き出す。

〈道成寺〉と〈清経（音取）〉は特別な作品であり、シテや楽器演奏者が上演にかける気迫は、ほかの作品とくらべて格段に大きい。無音の時間を、ドラマにみちた時間につくりあげることは、その同じ時間を音や説明で埋めつくすことよりも、はるかに困難である。能楽はその困難な挑戦を今も行っている。

藤田隆則（ふじた・たかのり）
一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。

天岸淨圓（あまぎし じょうえん）

1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。

◆「十悪の法然房」「愚痴の法然房」

法然聖人は自身を「十悪の法然房」「愚痴の法然房」と称されていました。ただ、聖人に心を寄せる人びとは「智慧第一の法然房」と讃えました。学問の深さ、戒律を持たれる堅固さ、人格の滋味の豊かさ。非の打ち所のない聖僧でした。しかし、自身に対しては先の通りでした。

「十悪」は「殺生」（殺し）、「偸盗」（盗み）、「淫」（SEX）、「妄語」（うそ）、「悪口」（暴言）、「両舌」（二枚舌）、「綺語」（べんちゃら）、「貪欲」（むさぼり）、「瞋恚」（怒り）、「愚痴」（自己中心のとらわれ）をいいます。謂わば人として最低のありさまです。さらには「極悪最下の人」とまでいわれています。自分より下劣な者は一人もいないという意味です。

私たちも「まことにお恥ずかしく、最低の人間です」などと、まことしやかに言っていますが、無意識にまだ自分より下に人がいると思っています。ただ、世の中にはごく希に言葉と想いが一致している人。言葉のとおりに自身を受けとめる方がおられるのです。誰もが自分と同じようないいかげんな言葉を使っていると考えて、他人を信じられないのは、真を語っていない者の浅ましさです。聖人は自分を最低位に置き、自身より下劣な者はいない。この私を救う仏法があるかを求め続けられ、その救いを阿弥陀仏の本願他力の「我にまかせよ」の仰せに聞き開かれたのです。

「源空（法然）が救われる」。それはこの世で救われない者は一人もいない事でした。聖人にとって他者はすべて自分より上位だったのです。その中には九歳の折、父を殺した「敵」の明石定明も、当代一と恐れられた大盗賊・耳四郎も例外ではありませんでした。私が救われることはあらゆる人が救われる。聖人は自身は最下に立ってすべての人びとを導かれたのです。そこには本願念仏による怨親平等の世界が展開していきました。

因みに、宗教の真偽を考えるとき、開祖自身が自分をどのように位置づけ、信者に呼ばせているかが大きなポイントになります。最近話題の韓国のキリスト教系の宗教団体では、韓国に第四の預言者が現れたと言っていました。

編集後記

今年になりコロナの規制も解け、各地でイベントや祭りが3年ぶり、4年ぶりで開催されている。人が気兼ねなく集まられる、往来できる。当たり前のことと思っていたこと。それができない、制限される。思ってもいないことだった。今、テレビで各種スポーツの試合を見る限り、そんなことがあったことが嘘みたいに思える。そしてマスコミはそれを盛り上げるかのように報道している。しかしウクライナでの戦争、異常気象等、浮かれてられないことも同時に進行しているのだが。

さて年間特集、少しでも明るいテーマでということで「まつり」にさせてもらった。今回のいとうせいこう氏の「まつり」。その「予感」とは、あらゆる分野において、それはいわゆる「数奇者」が抱く共通の思いであるに違いない。いや人はみな、何かそういうものを抱きながら、非日常と日常を行きかい、日々暮らしていたのもかもしれない。しかし現代人は非日常を好み、いつもお祭り騒ぎである。「まつり」を愛し、その土地を愛し、そしてそこに住む人たちを愛し一生を送る。そんな世界は帰ってこないかもしれないが、それが人生の原型であることを忘れないようにしたい。

合　掌

表紙の絵　前正覚山（プラグボディギリ）

（東本願寺襖絵）

前号はナイジャナ河（尼蓮禅河）から見たブッダガヤの大塔を描いていたが、その河の東に前正覚山の山脈が連なっている。絵の山はその山脈の一番南側で、ちょうどブッダガヤ辺りから見える姿である。ふたコブ形で岩と砂礫ばかりで登りにくい。釈尊の住したとされる石窟はもっと北側の山脈の中腹にあり、そこには現在チベット寺院がある。山脈といってもイメージする程の高さがなく、山裾は畑と多羅椰子が繁っている。今は麓近くまでは車で行き、そこからチベット寺院までの道は乞食ロードといわれ乞食がびっしりと並んでいる。山脈の下を南にぶらぶらと歩き河を渡れば（乾季には水がない）大塔まで三時間ほどである。苦行林は前正覚山よりもっと南にある。最も有名な苦行の釈尊像はガンダーラで制作されたもので、ラホールの博物館にあるが、苦行の像は他にもいくつもある。ガンダーラは仏跡から遠いため逆に釈尊への思慕が強く、大乗仏教が広がった地でもあるので、一般人は釈尊の具体的なイメージへの願望が強かったからである。バナラシ博物館にある苦行像は頭部しか残っていないが、真に心に迫る。

畠中光享（はたなか こうきょう）
日本画家／インド美術研究家／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛檀店
0120-81-7065　06-6771-7007
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12
（四天王寺西門交差点　西へ30m）

仏教を身近にする伝道誌 道標　二〇二三年　秋季号
2023年9月1日発行　発行所／浄土真宗を弘める会　萬福寺内　大阪市西区南堀江1-14-23　tel.06-6531-1328　fax.06-6531-1327　e-mail：ktda8.10@gmail.com